

# I 沿革

## 1. 本市の沿革

### [古代]

私たちの住む安房地方は、続日本紀に「元正天皇養老2年（718）5月上総国を割きて安房国を置く」と記されています。長狭<sup>ながさ</sup>という地名は、古事記の神武天皇<sup>かみやいみのみこと</sup>の条に「神八井耳命は長狭国造の祖」とあり、万葉集には長狭郡と朝夷郡出身の防人<sup>さきもり</sup>の歌二首が収められています。

また、「古語拾遺<sup>こごしゅうい</sup>」という古書に「その麻によろしき所、これを長麻と云う」と長狭の地名伝承を載せています。

長狭地方は沖積層によって形成されており、上古より地味が肥沃で、数千年前より原始生活を営む人びとが住んでいました。歴史時代になり、当地方は神八井耳命やその子孫などの地方豪族が統治していました。大化の改新(645)以降は、中央から派遣される国司（律令制の地方官「現在の知事」）によって支配されました。

### [中世]

治承4年（1180）8月、石橋山の合戦で敗退した源頼朝は安房に逃れ、安房の武士団を集めて再起を図りました。当時、安房の在地領主としては、丸氏・安西氏・神余氏などが知られています。当地域の代表的な在地領主には、長狭氏がいました。「吾妻鏡」治承4年9月3日の条によると、頼朝は、上総権介平広常<sup>ごんのすけたいらのひろつね</sup>のもとへ行こうとしたところ、長狭六郎常伴<sup>つねとも</sup>に襲撃されましたが、三浦義澄<sup>よしずみ</sup>の機転と奮闘により、長狭六郎常伴は討ち取られ危機を脱しました。当市域には「一戦場<sup>いっせんば</sup>」という地名があり、この出来事<sup>出来事</sup>の場所であるとする伝承があります。長狭氏滅亡後は、三浦氏の支配が行われたと伝えられています。鎌倉中期ころから東条氏が勢力を伸ばしました。

また、鎌倉幕府執権北条氏の家臣である工藤氏の一族とされる工藤吉隆が、天津を領有していたといわれ、小松原で東条景信に襲われた日蓮聖人を救い、討ち死にしました。

中世後期になると、安房に基盤をもった里見氏が、公方足利氏の権威を後ろ盾に在地武士を服属させ安房を統一し、里見氏やその重臣の正木氏が旧勢力に代わって、当地を支配しました。

その後、里見氏と正木氏で争いがあり、天正8年(1580)、正木氏の支城だった市内太田学<sup>おだかく</sup>の金山城や浜荻の葛ヶ崎城が里見氏によって落城しています。

市域の村々の形成があらましできあがったのは、このころといわれています。

### [近世]

江戸時代に入り、慶長19年(1614)に歴代10代、170年間にわたり安房に君臨した里見氏が改易され、以降は代官領・大名領・旗本知行所が混在しました。元和6年(1620)に西郷正員<sup>まさかず</sup>が、下総国生実<sup>おゆみ</sup>(現千葉市)から安房の朝夷・長狭の2郡内に領地を移され、東条東村宝性寺に陣屋を構え、東条藩と称しました。西郷氏は、元禄5年(1692)に下野国(栃木県)上田に転封となったため東条藩は廃藩となり、以後、東条の地に藩が置かれることはありませんでした。

東条藩が廃藩となった後の内浦・天津・浜荻の三か村は、勝浦藩領、岩槻藩領と代わり、小湊村は誕生寺領として明治維新を迎えました。四方木村は、天正18年(1590)に久留里藩領となり、その後、前橋藩領、川越藩領と代わりました。

寛永～承応年間(1624～1654)ころには、関西漁民が天津浦に出漁し始めたといわれ、鯛揚操網<sup>あぐり</sup>漁や八手網<sup>はちだ</sup>などさまざまな漁法が導入され、多数の紀州漁民が逗留し定住するようになり、「天津千軒」とうたわれたように繁栄しました。

また、享保7年(1722)には、里見氏以来の嶺岡牧<sup>みねおかまき</sup>が再興され、幕府の直轄地として経営されました。同牧には白牛も放牧され、酪<sup>らく</sup>(乳製品)の製造も行われました。このことが、わが国酪農の発祥といわれ、伝統として、長狭地区を中心に酪農が盛んです。

### [近代]

明治に入り、房州でも大名の異動がありました。明治元年(1868)9月に西尾忠篤<sup>ただあつ</sup>が、遠江横須賀から3万5,000石で当地に入封し、花房藩と公称しました。仮藩庁は横渚村<sup>よこすか</sup>に設けられ、藩主の宿所は広場の鏡忍寺に置かれました。版籍奉還・廃藩置県を経て、明治4年(1871)11月

の県の統廃合によって木更津県に組み入れられ、明治6年千葉県の新設によって、その管轄下に置かれました。その間、明治4年の明治天皇の大嘗祭では、市内北小町の田が主基齋田に選ばれています。

明治時代には多くの行政改革が行われました。明治22年(1889)の町村制の施行にともない、長狭郡62町村の合併がすすめられ、新たに太海村・曾呂村・大山村・吉尾村・由基村(大正4年10月主基村と改称)・田原村・鴨川町・西条村・東条村・天津町・湊村(昭和3年11月町制施行、小湊町と改称)の11町村となり、朝夷郡内の6村が合併して江見村(昭和3年11月町制施行)が成立しました。

なお安房国は、明治30年(1897)4月1日に平・安房・朝夷・長狭の4郡を廃し、1郡となりました。昭和4年には房総線が開通し交通の便がよくなり、この地帯は農業・水産業の盛んなどころとしてにぎわい、大いに発展をしました。

#### [現代]

戦後、昭和28年(1953)9月1日に施行された町村合併促進法によって、昭和29年7月1日に鴨川・東条・西条・田原が合併して鴨川町を、昭和30年2月11日には天津・小湊が合併して天津小湊町を、また同年3月31日には大山・吉尾・主基が合併して長狭町を、太海・曾呂・江見が合併して江見町をそれぞれ設置しました。この間、昭和29年6月1日に四方木村が天津町に編入されています。

鴨川町は農業と漁師町としてにぎわう一方、長狭全郷の経済の中心地として、物資の集散地・消費地として商業活動も活発化し、また自然美に富んだ房総の観光拠点基地として発展してきました。長狭町は嶺岡・清澄両山系の間を開けた細長い町で古くから酪農・果樹園芸・米作と農業中心に栄え、また江見町は太平洋岸に面した温暖な気候に恵まれた町で花き栽培が盛んであり、花の江見として名高いところです。

この鴨川町・長狭町・江見町の3町は、昭和45年(1970)3月12日施行の三万市制特例法に

基づき合併市制を施行し、昭和46年3月31日に鴨川市として発足しました。そして3次の基本構想と7次にわたる総合計画のもと、各種産業間の連携を図りながらハードやソフトの整備が進められてきました。

天津小湊町は、豊富な磯根資源や釣り漁業を中心とした漁業地として、また、清澄寺・誕生寺や鯛の浦などの日蓮聖人生誕の霊地や門前町としての特性を有し、風光明媚な観光の名所として広く知られています。

21世紀に入り、地方分権時代の到来を迎え、様々な課題に対応し、魅力的な地域づくりを進めて、南房総の拠点都市としてより発展するために、鴨川市と天津小湊町が合併し、平成17年2月11日、新鴨川市が誕生しました。令和2年には、市制施行15周年を迎えています。

